

こと、二つ目はその本人の困り感を、わがままとか自分勝手というような言葉で説明しないということ、三つ目は世界を分かり易くしていくこと、その上で長所を探して認めていくこと。そして援助は、必要なかぎり続けていくことです。

家や学校で気になる子がいたなという時には、仮説を立てていただきたいということがあります。どうしてこの子はこんなことするのだろう、というようなことを不思議がって頂きたいのですね。ADHD だから、アスペルガー症候群だからするのだ、ということではありません。例えば、他者を叩いてしまうような園児がいたとします。どうして叩いてしまうのかに接近して頂きたいのです。

「ちょっとちょっと」と触って遊びたいのだけでも、その加減がうまくいかないのだ」「イライラというものをぶつけようとして、ああいうふうに叩いちゃうのだよね」「自分の振るう手がどこまで届くのかよく分かってないのかもしれないよ」というような仮説を立て、否定的な表現を肯定的に書き直していきます。「触れるというのは遊ぼうよという気持ちはあって、その気持ちを後はどう表現するかだね」「イライラをぶつけているということは、イライラの解消方法を知っているということだね」「手がどこまで伸びるかが分かっていないなら、ボディイメージをつかめるような練習をしていけばいい」と考えます。

クラスの対応は、協力をいかに教えていくのか、責任を学ぶのかということ。クラス全体にはいろんな子どもがいるということ、担任の先生がいかに自然に伝えていくかということが大事です。特別な支援としては、不安や脅威については、分かり易く、始まりから終わりまでを提示し、理解してもらうことです。変化を嫌う子どもにもそ

のことが当てはまります。課題は必ずやり遂げられるものにし、説明は簡単にさせていただく。不注意に関しては散漫にならないように邪魔な物は排除する。衝動性のある子どもには正しいルールをその都度教えていくこと、多動についてはある程度我慢したら動けるということを保証することが大切だと思います。子どもたちが励まし合えるように、集団の中で恥ずかしい経験をしなないように運営をするということがとても大事になってきます。

関係者が今後より連携を目指していくために、途切れない支援をするために私がいつも思っているのは、それぞれの専門性がいかに尊重されるかです。批判しようと思ったらすぐ批判できます。しかし、現場に行ったらそれが無理だということが分かります。私達はいくまでも周辺の支え手なのです。手を携えながら真ん中に子どもがいるのです。そして支援のゴールというのは、その子が持っている応分の力で生きること、その子の力が周りから認められて、その子がささやかな喜びを持ち、生き甲斐を感じる心を持つことと思うのです。

そのために、医療、療育、保育、教育、親そして子ども。それがいかに手を携えることができるか、そして、自分のところで止まらずに上手にバトンタッチをしながら、きちっとそのバトンを渡しながらも、渡した人間が渡してホッとするのはなくて、その子の成長をずっと心配し続け、関心を持ち続けるってということが途切れない支援に繋がるのではないかと思います。

